

題 言

廣井勇博士傳成る

土木工學界の偉人廣井勇博士逝いて滿三年後の今日博士の傳記は一冊の書となつて世に出る事となつた。

博士は二十二歳にして單身渡米し、工學技術に關し、日本人として實に世界に向つて萬丈の氣を吐いた最初の一人者である。以來數十年間終始一貫して博士は國利民福の爲に精力を傾注した。然も其根本信念は人類愛の平和にあつた。博士の人格は實に工學以上に偉大であつた。

其等の美談や逸話は今まで殆んど世に知られなかつたものが多いのである。一點の詭道もなく、常に正々堂々の陣を進めた博士の一生は、現代青年處生の好指針たるのみならず一事一物に迷ひ悩める我が技術界の爲にも亦唯一の好指針たるものである。

秋夜讀書の好期先づ何よりも廣井博士傳の一讀普及を乞ふものである。

白鬚橋梁の井筒基礎工事

鋼拱橋の流行時代が來た。

前號に詳報したニューヨーク市のキルバンクルの拱橋は徑間千六百五十二呎一時で世界第一のもの昨今新聞電報で竣工を報ぜられつゝあるシドニー市の拱橋は徑間千六百五十呎で何れも最近の工事技術の精華を競ふものである。

我國では最近大阪市に淀川新橋の鋼拱橋が竣工して拱橋としては我國最大の偉觀を呈する事となつたが、徑間は僅かに三百尺に過ぎないので、シドニー及びニューヨーク市のそれに比すれば到底比較にならない小形のものである。本號に報道せる東京府の白鬚橋工事は鋼拱橋として注目すべきものであると同時に橋脚基礎工事の施工に於て多大の興味を

有するものである。同工事の主任技師たる佐野俊男氏は其研究的施工に就て多大の努力を拂ひ、長大なる井筒沈下工法に於て一新機軸を出されしものと思はれる。

我國にては基礎地盤の不良に因り長大なる徑間の鋼橋を架設なし得られざるは頗る遺憾の事なれども、合理的方法に依つて經濟的に大工事の設計を進め得らるゝまで實際技術の進歩しつゝある事は喜ぶべき現象である。

生命保險會社の高層建築

丸ノ内には目下三つの大生命保險會社が各高層建築を競ふてゐる。常盤生命と、明治生命と、日清生命の三社である。少し離れて日本橋に日本生命ビルも漸く工事着手に至つた將に生保ビルの競争時代の觀がある。

實際此の物價勞銀底落の時代に、比較的不動の資金を豊富に有する生命保險會社が百年耐久の大建築工事に投資する事は最も策の得たものと云へよう。徹底的に耐震耐火構造に依つて安全なる都市に一美觀を與へて貰ひ度いものである。

日比谷の一角に最近工を竣つた常盤生命ビルと三信ビルとは相隣接して互に高層の偉彩を放ちつゝある。三信は横河民輔博士事務所の設計にして常盤生命ビル國技工務所の設計である。何れも基礎工事に多大の悪質地盤と闘ひ、非常な難工事であつた。

今日外觀の美裝成つて行人の注意を注ぐもの多く、然も誰か其地下工事の苦心を思出すものがあらう。本號の常盤生命ビルの記事は未だ其等の工事に觸れてゐないが、我等は外觀の美にのみ因はるゝ事なく努めて其施工内容の堅實なる實質を参考にしたいと思ふ。